

■ 特集2 2013年度先端社会研究所定期研究会・報告記録 ■

2013年度第5回先端社会研究所定期研究会（「南アジア／インド班」第5回研究会講演録）
講 師：工藤 正子 氏（京都女子大学現代社会学部教授）＊講演時は同大学社会学部准教授
題 目：英国におけるパキスタン系コミュニティの変容
－第二世代の女性たちによるエスニック境界の交渉に着目して－
日 時：2014年1月24日（金）16:00～18:00
場 所：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス 先端社会研究所セミナールーム
司 会：鈴木 晋介
南アジア／インド班代表：関根 康正

○司会 それでは、先端社会研究所定期研究会2013年度第5回の研究会を始めさせていただきたいと思います。初めに、先端社会研究所所長の山口覚先生から御挨拶いただきます。

○山口 きょうは工藤先生、本当にお忙しいところ、本当にお忙しいと思うんですよ、この年度末なので、本当にきょうはありがとうございます。

この先端社会研究所ですけれども、基本的には他者問題というキーワードで研究活動をしてまいりました。つまり、基本的には社会の中でどうやって、誰を例えば包摂するか、あるいは誰を排除するかということに焦点を当てながら研究活動をしておりまして、今、3つの班が立っておりまして、きょうは南アジア／インド班ですけれども、中国国境域／雲南班、日本班、3つの班で活動をしておりまして、まさに他者問題、あるいは排除と包摂ということをキーワードに研究しております。

この南アジア／インド班ですけれども、メンバーはインドとかスリランカとかネパールとかに行っていて、現地で調査をしていただいておりますけれども、さらにこちらの定期研究会では本当に連続という形で、イギリスにおける、例えば南アジア系の方のいろんな活動、例えば音楽の展開なんていうことについてお話をいただいております、非常に連続して勉強させていただけるという感じがありがたいと思っております。

きょうは、工藤先生にはパキスタン系の二世の女性のことについて焦点を当ててお話をいただくということで本当に楽しみにしております。どうかよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

南アジア／インド班の関根康正先生のほうからお声がけさせていただきました……。

○関根 今、鈴木さんもおっしゃったように、工藤先生は京都女子大学で教えられていまして、きょうお話しいただく英国在住のパキスタン系コミュニティの研究と同時に在日のパキスタン系コミュニティというか、人たちの研究を進められているようで、私もそれほど詳しくないですけれども、そういう一般的なことだけじゃなくて、特に女性たちの働き方、あるいは生活の仕方、もっと細かくは、以前、学会で1回聞いたことあるんですけど、旦那さんがパキスタン系の人で奥さんが日本人という場合のケース、いろいろ多岐にわたって御研究をされておられます。先ほど所長も紹介されましたけど、1つ紹介すると、『移民のヨーロッパ』という竹沢尚一郎さんの編集したこの

本の中に工藤先生が在英パキスタンの女性たちの、特に二世の人たちの様子がよくわかる論文を書かれております。

そういう話ともきょうは非常にかかわるんだろうと思いますけれども、概要を読んだだけでも非常に周縁化が複層性を持つてることがわかりますし、あとは、この定期研究会の第1回に外大の若松邦弘先生に来ていただいたときに、皆さん覚えてると思いますけど、いわゆるブリティッシュ・エイジアンと言うとき、南アジア系のイギリス人ですけど、中身はインド系とパキスタン系とバングラデシュ系と少なくともいて、ほかにもいますけど、その場合にちょっと差が出てきてると。つまりインド系の社会上昇に比べてパキスタン系、バングラデシュ系はちょっとおくらせてるという数字を示したお話があったのが印象的でした。そのとき私は工藤先生のことを思い出したりしてまして、そういう意味で、研究会としても非常にある種の連続性があるし、交差すると思います。きょうはよろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

それでは、工藤先生に御発表をお願いいたします。英国におけるパキスタン系コミュニティの変容－第二世代の女性たちによるエスニック境界の交渉に着目して－というタイトルでお願いいたします。大体時間は1時間ちょっと、ここからはもう工藤先生にお任せいたしますので、存分をお願いいたします。よろしく願いいたします。

■ 特集2 2013年度先端社会研究所定期研究会・報告記録 ■

「南アジア／インド班」第5回研究会講演録

英国におけるパキスタン系コミュニティの変容
－第二世代の女性たちによるエスニック境界の交渉に着目して－

工藤 正子

(京都女子大学現代社会学部教授)

どうもありがとうございます。

私は日本のパキスタン人のコミュニティの中で調査をしてみたりまして、1990年代の末期ぐらいから関東で主に日本人女性との国際結婚のケースを扱ってきたのですが、博士論文が終わったぐらいの時期に、さきほど関根先生が御紹介くださいました竹沢尚一郎先生の本¹⁾のもととなったプロジェクトへの参加を契機に、2006年よりイギリスのロンドンやバーミンガムのパキスタン系のコミュニティで調査をしてみたりしました。どうぞよろしく願いいたします。

本発表の議論は、第二次世界大戦後に英領インドから分離独立した後のパキスタンからイギリスに労働移動した移民の第二世代であるパキスタン系イギリス人の女性を主な対象にしています。彼女たちが家族やエスニック・コミュニティ、それから主流社会という多重の空間を生きる中で、みずからの帰属をどのように交渉して、そこに排除や包摂の力がどういうふうに通じるのかということについて考察してみたいと思います。

まず最初に、「パキスタン系」として統計上にあらわれる人々のイギリス国内及びその調査地であるバーミンガム市における社会経済的な地位の特徴を見た後で、彼ら、彼女らのイギリスにおける位置取りの多様性を、聞き取り調査の結果から見てみたいと思います。

その後、男女隔離という、南アジア地域にみられる宗教文化的なジェンダー規範が女性たちにとって大きな課題となるわけですが、そうした規範が女性たちによって挑戦され、交渉される主なきっかけである進学、結婚、就労を取り上げます。そこで女性たちが既存のエスニック境界をどのように交渉して、そこにどのような過去との継続と変容が見られるのかを見てみたいと思います。

最後に、第二世代の女性たちが新たな共同性を切り開いていく可能性についても、参与観察の結果をもとに議論したいと思います。まだまだ理論的な切り口が自分の中で定まっておらず、どちらかというと現状をまとめて報告するといった形になると思うのですが、どうぞよろしく願いいたします。

まず、調査の概要ですが、先ほど申しましたように、2006年以降、昨年2013年の夏まで夏季二、三週間程度行っております。2009年からは、レジユメの最後にかきました科研調査の一

1) 竹沢尚一郎(編)(2011)『移民のヨーロッパ:国際比較の視点から』明石書店。

環として調査を行っております²⁾。

調査地は主にバーミンガムですが、そのほかマンチェスターとかレスターーレスターはインド系のムスリムが多いようですが、あとロンドン近郊でもパキスタン系が多いハウズロー (Hounslow) とかハイウィック (High Wycombe) という地域でも聞き取りをいたしました。

調査対象者についてですが、これまで54名の女性に聞き取りをしております、雪だるま式で調査対象者を募ってまいりましたので、後で申し上げるように、ある程度の属性の偏りはあります。第二世代がその中の7割で、年齢で言いますと、20代から30代が7割、40代が2割と20代から40代が9割を占めています。

結婚に関連しては、既婚者が7割です。離婚はパキスタン系コミュニティの中でスティグマ化されてはいるのですが、次第にふえておまして、離婚した女性も4名おります。独身者が3割。学歴では大学卒以上が57%です。

宗教的にはスンニ派ムスリムがほとんどなのですが、パキスタンではイスラームの異端とされており、アハマディーヤ (Ahmadiya) の2名の女性にも聞き取りをしております。女性だけではなくて男性にも少しずつ聞き取りをしております、これまでに10名ほど、市の職員とかNGOのスタッフなどに聞き取りをしています。

調査方法は、30分から1時間程度ライフヒストリーと現在の生活状況、主に結婚、家族、就労、家庭内役割、特にケア役割について聞き取り調査をし、併行して、家庭で行われるイスラームのお祭り (イード) の食事会に参加させてもらったり、移民ムスリム女性支援組織などでの参与観察を行っています。

パキスタン系イギリス人の社会経済的地位

次に、パキスタン系イギリス人の社会経済的な地位がどのようなものかということについて統計を中心に見ていきます。これは若松先生の以前の御発表で詳しいお話があったかと思うので、簡単にお話をいたします。

統計調査は2011年の国勢調査 (センサス) で人口を見ますと、このグラフの一番青い大きい、つまり多数派が「ホワイト (白人)」です。それ以外の色のところが全てエスニック・マイノリティーと言われる人たちです。ただ、ホワイトの中には東欧出身の移民も入っています。パキスタン系の方はここですね、薄い色のほうが2001年で、濃い色の棒のほうが10年後の2011年ですけれども、パキスタン系が、インド系もそうですが、伸びていることがわかります³⁾。

パキスタン系は、イギリス (United Kingdom) 全人口の1.9%を占めています。1951年には約

2) 本発表のもととなった調査は、人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本」の研究プロジェクト「交流と表象」の「移民と国民国家」班 (代表・竹沢尚一郎)、JSPS 科研費 JP 21520810 (「現代イギリスのパキスタン系ムスリム女性の就労意識と実践」研究代表者: 工藤正子)、JSPS 科研費 JP 24520928 (「多文化社会のケア・ジェンダー・エスニシティ: パキスタン系イギリス女性の事例から」研究代表者: 工藤正子) の助成を受けている。

3) 2011 Census <http://www.ons.gov.uk/ons/> (2014/1/10 アクセス)

5,000人だったと言われているのですが⁴⁾、2001年にそれが約74万人になり、2011年には117万人余に増加しています。パキスタン系ではなくて宗教別で見えますと、2001年にはムスリム人口は約159万人だったのが2011年には約270万人と、こちらも大きく伸びています。

これはイギリス全土の地図ですが、パキスタン系が多いのがこのバーミンガムとかマンチェスターなどの過去に産業都市だったところですがけれども、南部のほうは白人が多数派で、例えばこのボーンマスではパキスタン系は人口の0.1%と、かなり低くなっているのに対して、ヨークシャー、この北部のほうでは、ブラッドフォードなどではパキスタン系の占める率が高く、人口の20%ぐらいいて、バーミンガムでは13.5%です。そういうふうに地域的にかなりばらつきがあります。ロンドン自体では2.7%ですがけれども、例えば、郊外のスラウ（Slough）というところにはかなりパキスタン系が多く、17.7%がパキスタン系で、聞き取りによるとかなり専門職の人も多いそうです。このように、社会経済的な地位でも地域別で違いがあります⁵⁾。

移住史に話を進めます。1947年の英領インドからの分離独立後の50年代から60年代にパキスタンから労働移民の大きな波がありまして、その圧倒的多数は単身男性でした。これらの人々は1948年の国籍法では英国市民として扱われていました。

その後、ノッティンガムやロンドンでの都市騒擾事件などをきっかけに移民政策が厳格化していきます。それに従って移入の流れも労働者から家族結合に変化しまして、60年代以降は妻たちが呼び寄せられるという流れに変わっていきます。

その後も結婚、配偶者の呼び寄せの流れはずっと現在まで続いています。それもだんだんと厳しくなっているのですが、新しい移民は絶えず来ているということは言えます。

その次に、有色、いわゆるカラードとしての排除に加えて、1989年のラシュディ事件⁶⁾、2001年のニューヨークの同時多発テロ、2005年の7・7のロンドン連続爆破事件などを経て、イギリスのムスリムが社会の監視の対象になっていく傾向が強くなりました。イギリスの中の「内なる他者」としてのムスリムのステレオタイプが非常に強くなっていきます。

一連のテロによってムスリムが周縁化される一方で、後でも申しますが、こうした過程の中でブリティッシュ・ムスリムの人たちが政治的な主体性を獲得してきたということも言われています⁷⁾。

こうした人々の経済的な位置ですが、当初のパキスタン移民は工場労働者が多数派であったわけですがけれども、1980年代にイギリスの産業構造が変化してくる中でサービス業へのシフトが生じ、

4) アンワル、ムハンマド 2002 [1996] 『イギリスの中のパキスタン：隔離化された生活の現実』（佐久間孝正・訳）明石書店。

5) Office for National Statistics HP (2012) *Ethnicity and National Identity in England and Wales 2011*. (2013年12月11日アクセス)

6) Vertovec, Steven (2008), "Islamophobia and Muslim Recognition in Britain," in *Transnational South Asians: The Making of A Neo-Diaspora*, Suzan Koshy and R. Radhakrishnan (eds.), Oxford U.P.

7) Peace, Timothy (2013), 'Muslims and electoral politics in Britain: the case of Respect', in J. Nielsen ed., *Muslim Political Participation in Europe*, Edinburgh University Press, pp.426-454.; Peace, Timothy (2013), 'All I'm asking, is for a little Respect: Assessing the performance of Britain's most successful radical left party', *Parliamentary Affairs* 66(2), pp.405-424.

Akhtar, Parveen (2012), 'British Muslim political participation: After Bradford', *The Political Quarterly* 83(4), 762-766. 新たな政治的な主体の出現および関連文献については若松邦弘氏にご教示を頂いた。

同時に不況期を迎えます。このとき、工場労働者が多かったアジア系、特にパキスタン系が大きな打撃を受け、大量の失業者が出るという状況がこのときに起こります。

もう一つ言われているのは、アジア系－イギリスでは主に南アジア系を指して「アジア系 (Asian)」と言いますが－の内部の格差が顕在化してきたのがこの1980年代だと言われています。1994年の調査でも、パキスタン系とバングラデシュ系の教育レベルと経済的な地位が低いことが見てとれます⁸⁾。

その後、パキスタン系人口の教育レベル自体は上がってきますが、問題は、就労状況が多少よくなったとしても、内実はパート労働など、不況にさらされやすい就労形態にある人が多いということと、自営業率が高いということが言われています。

私の調査地のバーミンガムですけれども、バーミンガムは18世紀に産業都市として発展し、19世紀にアイルランドからの移民が入ってきまして、1950年代から60年代にインド亜大陸、それからカリブ海諸島から旧英領移民が入ってきます。80年代の不況でバーミンガムは都市として荒廃しまして、その後、再開発して成功します⁹⁾。今のバーミンガムは、よく絵はがきなどに出ている市庁舎のあたりですとか中心街は今こういう感じになっています。ムスリムの女性などもたくさん見えますけれども、エスニック・マイノリティーと呼ばれる人々がこの街には多いということがよくわかります。

集団別の人口構成で見ますと、これはバーミンガムのエスニック別の人口構成ですが、これがホワイト・ブリティッシュ (白人系イギリス人)、これがパキスタン系、赤いほうが2011年で、一番最近のものですけれども、パキスタン系が占める割合が伸びていることがわかります¹⁰⁾。

2011年の国勢調査でバーミンガムの人口はおよそ107万人ですが、その中でパキスタン系が今14万人ぐらいいまして、13.5%を占めています。特にバーミンガムは、よく言われるのが、同じくパキスタン系の多いマンチェスターと比べて、(同じパキスタン系でも) カシュミール系の人が多いということです。マンチェスターではパンジャブ系の移民が多いのに対して、バーミンガムではカシュミール系が多いとよく言われます。

パキスタン系のバーミンガムの社会経済的地位は、全国的に見たのと同じように、やはりパキスタン系とバングラデシュ系が他のエスニック集団と比べて労働力率が低いことがわかります。特に80年代の産業構造の転換と不況による打撃がバーミンガムでは非常にはっきりとした形で出てきたということがあって、1991年にはパキスタン系男性の56%が失業状態にあったということが記録されています¹¹⁾。

パキスタン系の居住地ですが、これはバーミンガムの地図ですけれども、この辺がシティセンターなんです、インナーシティと言われる都市の中心地域の、かつては白人の労働者階級が集住し

8) Modood, Tariq et al. (1997) *Ethnic Minorities in Britain: Diversity and Disadvantage*. Polity Press.

9) 鈴木茂 (2008) 「ポスト工業化時代の都市再生と地域経済：イギリス・バーミンガムを事例に」中村剛治郎 (編) 『基本ケースで学ぶ地域経済学』有斐閣ブックス, pp.270-287.

10) Birmingham City Council (http://www.birmingham.gov.uk/downloads/file/4564/2011_Census_Birmingham_Population_and_Migration_Report.pdf 2014/01/17 アクセス)。

11) Chishti, Makhdoom Ahmad (2008) "Pakistani Community," Makhdoom Ahmad Chishti (ed.), *Lok Virsa: Cultural Heritage*, Brewin Books, pp.31-33.

ていた地域に移民の人たちが入ってきました。例えば、スパーブルック (Sparbrook) などの地域に移民が集住しています。白人の労働者階級の人たちは都市の再開発の流れの中で郊外の新興住宅地に移動していったのに対して、エスニック・マイノリティーのとくに低所得者層の移民たちは今もこの辺にとどまっていて、インナーシティにおける特にパキスタン系の集住が見られます。パキスタン系でも若い世代とか、経済的に成功した人たちはインナーシティの中から外に出ていくという流れもありますが、ほぼ9割がインナーシティに集住しているということです¹²⁾。

自己定義の多様性—聞き取り調査の結果から

今までパキスタン系のイギリス全国、それからバーミンガムにおける概要をお話ししてきたのですが、こうした状況の中でパキスタン系の特に二世の人たちが自己をどうふうに定義しているのかということについて、その多様性を聞き取り調査のデータからお話をしたいと思います。

まず、インナーシティの様子を写真でお見せします。これがインナーシティのいわゆる「アジア人街 (Asian street)」と言われる地域の食品店で、これはブルカをかぶった人たち、多分パキスタン系のなかでもパシュトゥーン系の女性たちだと思います。

これはイード (イスラームの祭り) を前に買い物をしている写真です。これがイギリスの「テラスハウス (terraced house)」のなかでも特に労働者階級の人々が住む地区によく見られるような家並みで、ここにもおそらくパキスタン系であろう男の子たちが集まって遊んでいるのが見えます。この近くのレイディープール・ロード (Ladypool Road) にアジア人街があります。

では、パキスタン系の二世の人たちがどういう経験をしてきたかということですが、ある第二世代の女性 (50代) の語りを紹介します。彼女は結婚してバーミンガムに来た人で、その前は同じくパキスタン系の多いハイウィックコム (High Wycombe) に住んでいました。彼女は大学に進学する生徒が進むグラマースクールに進学しましたが、そこでは当時、アジア系が自分だけで、周りは主にミドルクラスの白人だった。自分の弟たちは、当時の「セカンダリーモダン (Secondary Modern)」という、大学に行かない子たちが行く学校に行き、そうした学校では、特に白人の労働者階級の子どもたちが多く、移民への排斥が非常に強かったということです。

彼女は1970年代後半に10代の後半を過ごしているんですけども、今も覚えているのは、下校時にバスをおりると、セカンダリーモダンのパキスタン系の子どもたちがホッケーの棒などを持って帰ってくるんだけど、その後ろに白人の労働者階級の子どもたちが追いかけてくるというもので、とても怖かったと。自分たちのホーム (our home) にいて、家の近所 (our street) なのに、なぜこんな目に遭わなければいけないのかと思ったという思い出を話しています。

14歳のときに、ハイウィックコムで移民排斥を掲げるナショナルフロント (National Front) の勢力が強く、それに対して移民の住民が集会をしたそうなのですが、弟はこのときにこの反対運動に加わって、その経験から弟はとても政治的になったと述べています。こういうふう成長過程で移民として排除され、学校という場でも、自分の住む場所でも排除を経験してきたという語りです。

12) アンワル・ムハンマド (2002 [1996]) 『イギリスの中のパキスタン：隔離化された生活の現実』(佐久間孝正・訳) 明石書店。

「移民」としての排除の経験は、先ほど申しましたように、2000年代になると変わってきました、テロの後のイスラーム嫌悪の拡大と浸透の中で排除の対象が推移してきます。1990年代から2000年にかけて10代を過ぎた、ある男性は、以前は学校で「パキ（“Paki”：パキスタン系移民に対する差別的な名指し）」と言われていじめられていたんだけど、9・11後には「ムスリム」といっていじめられるようになった、ということを言っています。

一方で、9・11後の排除が、ムスリムとしての宗教的アイデンティティを再構築する契機になったというケースもあります。80年代生まれのある女性は、80年代は「エイジアン」であることに自信が持てない時期であったと。彼女はカトリック系の学校に行っていて、母親が（パキスタンの）シャルワール・カミーズを着て迎えに来るのがすごく恥ずかしかったと回想しています。90年代後期になって、アジア系が自分たちの文化、例えば、音楽や着るものに自信を持つようになったと言っていました。

その後、彼女は中部の大学に行ったんですが、9・11をそのときに経験して、自分と宗教を見つめざるを得なくなったそうです。このときに彼女はヒジャーブをかぶり始めたそうなんですけれども、一緒に住んでいたヒンドゥーとスイクの友だちからヒジャーブを被るならもう友だちじゃないと言われたそうです。その前は、宗教は意識的ではなくて自分の生活の一部でしかなかったけれども、その後、ムスリムとしての生き方は世間で言われているようなテロリストとは違うんだ、ということに意識的になったという変化を述べています。先ほど言ったように、テロの後でムスリムが社会の中で周縁化されてくる中でブリティッシュ・ムスリムとしての政治的主体が形成されていくという過程がこの女性の語りの中にも見えるような気がします。

次に、パキスタン系内部の多様性についてお話しします。まず、先ほど申しましたように、パンジャービー（パンジャーブ系）と自認する人たちがカシュミールのミールプーリー（ミールプール系）を、彼らは村の出身者で教育がないとか、あと結婚に対しても非常に考え方が古いという語りで差異化することがよく見られました。例えば、（イギリスでは）パキスタン系といっても多くがカシュミールで、パンジャービーは少数派だ。カシュミールは村の出身で、私たちパンジャービーとは違うのだ、という語りがよく見られました。

イギリスではカシュミール系が多いと言われるのですが、私の54名の女性の調査対象者の中では、パンジャービーの人たちが25名、約半数おりました。これは雪だるま式で聞き取り対象者を募りましたので、かなりパンジャービーの人が多くなったということも考えられます。こうしたパンジャービーの人たちの中でミールプーリーを自己と差異化する語りがよく見られました。

ただ、第三世になってきますと、そうした（パキスタン系のなかの）エスニシティで自己を規定しないこともあるようです。例えば、ある女性はミールプール出身だけでも、それは自分のアイデンティティのなかで重要ではないと言っていました。

そのほかのパキスタン系の中の差異としましては、宗教、同じムスリムでも親の世代と自分を差異化したり、宗教内でデーオバンディー（Deobandi）とかバレールヴィー（Barelvi）という派の違いや、あと、アフマディーヤ（Ahmadiya）もいますけれども、そういうふうに宗教的にみて、自分たちを他の派や集団に対して差異化することもあります。

また、同じアジア系でも、東アフリカからの再移民であるとか、一世か一、五世か二世か、ある

いは結婚移民としてパキスタンからイギリスに来た人かななどによってもイギリスでの立ち位置は随分違ってきますし、自己定義も変わってくるようです。このように自己定義は非常に重層的なものであるということが言えます。

次は、親の国パキスタンに対して、第二世代がどのような認識をもっているのかについてお話しします。これについては、パキスタンに行くと言ったと違和感を持った、という語りのほうが多かったです。例えば、ある女性（40代）は、パキスタンに初めて行ったのは2歳のときで、その後は大学を終えて仕事が決まったときに行きました。そのとき、最初はドバイに寄って、すごく近代的できれいなところで楽しかったが、パキスタンに着いたらそうじゃなくて、全く違う社会だったということでした。歯がゆい思いもしたと言っており、というのも、女性として見たとき、（当時は特に）パキスタンでは女性が家にいて、外で働かず、自分たちが持つ能力を無駄にしていると。それから、家に掃除の人が来る。あっちで自分の家のこと（掃除など）を自分でやっていると、外国人でしょう、アメリカ人かイギリス人でしょう、と言われたそうです。

二世の女性の間では、パキスタンでは歩いているだけで、なぜか彼女たちが「外国人」だとすぐに気づかれてしまう、という語りが見られました。そういうふうに関の国パキスタンで差異化されたり、排除される経験とか、逆に、女性の間では、パキスタンの女性と自分を差異化するという語りが見られました。

ただ、パキスタン系、あるいはアジア系としての文化が、イギリスの自分のローカルな場所で容易に参照可能になってきたということも、90年代から2000年代にかけて言えるようです。ある女性は、衣服について、1970年代後期に10代後半だったときにはシャルワール・カミーズは自分でつくっていて、90年代になっても生地だけしか売ってなかった。それが、2000年代初めぐらいになって、パキスタンの既製品がイギリスでも手に入るようになったと。今はどこでもバラエティーに富む店があって、既製品が手に入って選択肢も広いと。パキスタンの（シャルワール・カミーズの）トレンドが昔より早くイギリスにも入ってくるようになったとも言っています。パキスタンの人気ブランドがこっちにできたということも言っていて、それが大きな変化だと言っています。

また、ハラール食品に関しても、今はテスコとかそういった主流のスーパーマーケットでハラール・フードのさまざまな食品が手に入るようになったと、昔はそうじゃなかったということがよく言われます。このようにイギリス内で宗教的、文化的に自律的な空間が確保されてきたということが1つ言えると思います。

これは、例えばある女性は、アラムロック（Alum Rock）（パキスタン系、特にミールプール系の集住地域として知られる）を車で通っているときに、通りで白人のイングリッシュを見たら、「あの人、迷いこんじゃったのね」、というふうに（つまり、ここは私たちの場所であって、イングリッシュがいるはずがない、と）家族で冗談をいうんだ、と言っています。

それから、別のパキスタンの店が集まっている通りをあるパキスタン系女性と車で通っていたときに、同乗していた20代の娘さんが、あるレストランを指さして、ほら、あそこは「ゴラ（gora）」¹³⁾がアルコールの持ち込みをやってから嫌なのよと言っていました。

13) ウルドゥー語で白人の（ここでは特にイングリッシュの）男性を指す。白人女性は *gori*、エスニック集

こういうふうにかなり自律的な空間がディアスポラにおいて確立され、そこではイングリッシュの人たちが逆に排除されているということも言えるのですが、2001年以降はそうしたインナーシティに隠しカメラが設置されていたことが後でわかった、というようにマイノリティへの監視が強化されていることも同時に意識されています。

こうしたパキスタン系の二世世代の人たちが自分をどういうふうに語っているかというお話をします。1つ目には、イギリスでもパキスタンでも周縁化され、どちらにも属せないという語りがあります。

2つ目には、アイデンティティが非常に不安定であると語る人もいました。ある30代の男性は、三世はブリティッシュとしてのアイデンティティに自信を持っているけれども、自分たち二世は(成長期に)非常に不安定だったと言っています。また、彼は、お金だけで地位を上げた新興のニューリッチつまり、パキスタンからイギリスに出稼ぎに来た自分の親たちーは、子どもの教育に投資してきた、これで子どもたちは英語を話せるようになり、自分たちの地位があると思っているけれども、一方で、自分たちは誰なのかという疑問や不安があると。

彼によれば、これに対して、パキスタンのエリート層は、王朝からの伝統やハイカルチャーを文化資本として持っている。例えば会話の中にウルドゥー語の詩的教養などを挟むことなどができると。アメリカのパキスタン系には裕福なエリート層もいて、そうした文化資本を持っているけれども、大多数が労働者としてこの国(イギリス)にやってきた親たちはそういうことはない。アメリカのそうしたエリート層の人たちのほうが、アイデンティティがしっかりしているのではないか、という語りもありました。

もう一つ気がついたのは、アイデンティティについて、あなたは自分をどういうふうに定義しますかと聞いたときに、アイデンティティという概念そのものに対して異議を申し立てる人がいたことです。ある離婚女性は、自分はムスリムというよりも、母であって、かつては妻であって、というふうにいるんな立ち位置があって、そのどれかを選ぶことはできないと。特に、ムスリムに対しては、「あなたのアイデンティティとは何ですか」ということが常に問われるーつまり、ムスリムとして一義的に定義されるーけれども、キリスト教とかヒンドゥー教徒の人にはそういう位置づけは求められないでしょう、と言っていたのが印象的でした。

こうした中で、「ブリティッシュ」として自己を定義する傾向が見られまして、その語りの中で、1つはイギリスの市民権を強調する人が多かったことが指摘できます。

例えば、ある女性は、「この国イギリスが好きなのは、ここでは何かがあれば市民としての権利が与えられていることだ」と言い、パキスタン社会には市民に市民としての権利がないと対比をしています。それから、敬虔なイスラーム教徒である彼女の母親が、彼女と兄に「クルアーンが一番大切な本なのよ」と言ったときに、兄は「そうじゃない」と反論して、母親が、「じゃあ、どの本なの」と聞くと、イギリスのパスポートを母親に見せて、「この本こそが自分たちにとっては一番大切なんだ」と母親に言い返したそうです。彼女はこのエピソードを話してくれた後で、親は、パ

、 団としての「白人」は、*gore log* とよばれ、「我々パキスタン系」と差異化する名指しとして使用される (Charsley 2013: 13, 19)。Charsley, Katherine (2013) *Transnational Pakistani Connections: Marrying 'back home'*, Routledge.

キスタンが自分の国だと強く感じているけれども、私と兄はそうじゃないと、自分たちはブリティッシュとして自己を意識していると言っていました。移民の親子間の帰属意識の差を示すうえで象徴的な語りかと思います。この家は母親が教師で、子どもたち二人ともロンドンの大学を卒業しています。

しかし、そうした市民権をめぐる語りがある一方で、そうした帰属意識は、イギリスでの経済的地位によって差異があるようです。例えば、あるタクシー運転手が言っていたのは、自分はパキスタンのカシュミールに家を持っている、何かあったときに家をあっちにしておく必要がある、ここでは何が起きるかわからないから、例えばBNP (British National Party) という右翼の人たちがサッカーのトーナメントの後に街に繰り出して行進するんだけれども、そういう人を見ていて脅威を感じる、ということでした。イギリスでは何があるかわからないと。いつ、どういうふうに、この国を追い出されるかわからないので、パキスタンにいつも居場所を保持しておく必要があると。こういうふうに、立ち位置によって、「ブリティッシュ」として、あるいは市民としての位置取り、感覚は違っていると言えらると思います。

もう一つは、ブリティッシュだけではなくて、そこにムスリムということも重要な要素として入ってくると言う人がいます。例えば、自分は「ブリティッシュ・ムスリム」であって「パキスタン系」だと思わない、ここが自分のホームなのだ、と言う人がいました。また、親の世代はイスラームが「伝統」だったんだけれども、今は違うと。私たちは「宗教」としてイスラームを捉えていると。

自己意識の仕方には、階級的な要素も入ってくるようです。例えば英語のアクセントを自分や同じパキスタン系を見る一つの指標として使うことはよくありますし、そうした多重な自己定義の仕方が見られました。

二世になって、ブリティッシュとして定義するだけではなくてムスリムとしてのスペースを確保しようとしていることは、子育てをしている女性たちが自分の子どもたちをどう教育しようとしているかにも見ることができます。

息子が歯科医を目指しているという二世の女性は、(イスラームによれば) この世で過ごす時間はほんの短い時間に過ぎず、幾ら物質的に恵まれてもそれはすぐ終わる。私たちの宗教では死後に審判を受けて、そのとき、自分たちがムスリムとしてしたこと、しなかったことを説明しなければいけない。多くの人たちはいろいろ言い訳をして、工場のシフトが長かったから断食ができなかったから、とかと言うだろうけれども、息子にはそういうことは言ってほしくない。だから、イスラームの信仰実践と両立させられるような仕事、特に専門職についてはほしいのだと言っています。

第二世代の位置取りについて最後にお話しておきたいのは、空間移動の仕方が第一世代と比べて大きく変わってきたことです。第一世代のときにはイギリスのバーミンガムのインナーシティで工場と自分の家の往復と、それからパキスタンに時々帰るといった移動であったのが、第二世代になりますと、パキスタンにもたまには行くけれども、英国内でも就職や進学で都市間を移動したり、あと(パキスタンではない) 海外への移動もかなりふえています。それは、例えば観光旅行とかマッカ巡礼もありますが、仕事で出張するとか、ボランティアで日本に来たという若者もいました。そうした空間移動の仕方が自己形成に影響を与えていることは、男性だけではなく女性にも見ること

ができます。

女性たちの生活実践—進学、結婚、就労

次に、女性に焦点を当てて、進学、結婚、就労にどういう特徴が見られてきたかということをお話ししたいと思います。

女性たちについては、やはり一世と二世はこれらの点でかなり違うのですが、一方で、宗教的、文化的なパルダ (*purda*) と呼ばれるジェンダー規範がかなり彼女たちの空間移動を制約しているということが言えます。パルダというのは、あるカテゴリーの男性から女性を隔離するという実践で、とくに女性のセクシャリティを管理するための社会的手段として理解されていて、南アジアでは広く認められますが、ムスリムの間では宗教的な規範として捉えられて正当化されることが多いといえます¹⁴⁾。

重要なのは、その実践が、当の女性個人だけではなくて親族集団や家族の名誉とか男性の名誉、対面を大きく左右すると意識されているところです。ある女性 (50代) は、娘を家から出して大学に行かせたけれども、このジェンダー規範のために、家を出たことは自分たちの名誉にとって大きなリスクだったと回想していました。また別の女性 (30代) は、兄は若いときに海外を広く旅行したけれども、自分には望んだとしてもそういうことは許されなかっただろうと、兄と自分を対比して語っていました。

大学進学状況はといいますと、80年代後期から90年代前期にイギリス社会全体で進学率が大きく伸びました。この背景として、イギリスでこの時期に新設の大学が増加したことがあります。こうした中で、パキスタン系の女性は、教育の達成度は依然として他のエスニック集団と比較して低いのですが、大学進学者はかなり増加しています¹⁵⁾。進学先は新設大学のほうが断然多いです¹⁶⁾。大学に進学した調査対象者は54名中31名で、半数に上っています。親の圧倒的多数は工場で働いていた人たちで、母親は専業主婦だった人たちです。ですから、教育レベルでいうと、世代間の上昇移動がみられると言えます。

結婚については、パキスタン系同志の結婚が今も主流です。2001年の国勢調査で見えますと、パキスタン系では、男性、女性ともにパキスタン系との結婚が9割を超えています¹⁷⁾。調査対象者も圧倒的多数がパキスタン系同志で結婚をしています。

伝統的に理想的な結婚は、親とか周囲が縁談をもってくるアレンジドマリッジ (*arranged marriage*) が理想とされています。これは一般的には、強制的なものではないので、アシスティッドマリッジ (*assisted marriage*) と呼ぶべきだと言う研究者もいます。いとこ婚が理想とされています

14) 工藤正子 (2008) 『越境の人類学：在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会。

15) Ahmad, Fauzia (2001) "Modern Traditions?," *British Muslim Women and Academic Achievement, Gender and Education*, 13(2) : 137-152.

16) 工藤正子 (2011) 「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」、竹沢尚一郎 (編) 『移民のヨーロッパ：国際比較の視点から』明石書店、pp.172-197。

17) Office for National Statistics (2004) *Census 2001 : National Report for England and Wales part 2*.

が、そのなかでパキスタンからいところを呼び寄せるとい現象が見られます¹⁸⁾。パキスタンから配偶者を呼び寄せるとい現象は次第に少なくなっているようですが、やはり結婚について語るときには「近い者同士」がいいという語りが多く見られます。

ある女性は、娘の結婚相手として、できるだけ近い者同士が理想（“As close as we can get”）と言っています。何を指して「近い」と言うのかということに対しては、デーオバンディー派とバレーヴィー派の宗教的違いであったり、ミールプーリーとパンジャービーのエスシティの違いであったりとか、何を指して違う、あるいは近いと言うのかは、その人の立ち位置によって随分と変わってきます。

こうした中で1つ言えるのは、二世の女性のあいだで結婚相手探しで苦勞している人が多いということでした。例えば、（イギリス生まれではなく）パキスタン出身の女性のほうが慎ましく、宗教的、文化的に花嫁として望ましいという語りがあります。そこには、母親として、次の世代にいかにか“真正なる”言語や文化を継承できるか、という基準もあります。

イギリスで大学に行くことは、女性が結婚市場で有利な立場を確保するためにも重要とされています。ただし、教育程度が高すぎたり、結婚適齢期と言われる時期を逃してしまうと難しくなるようです。ある女性は初めてインタビューしたときは30代の後半で、大学卒で専門職の仕事をしていました。その当時から、結婚したら仕事をやめてもいいと思っており、別に結婚相手を選び好みしてるわけじゃないとも言っていました。一方で、パキスタンからの配偶者呼び寄せは嫌で、なぜなら、彼女のお姉さんが、縁談でパキスタンから相手を選び寄せたのですが、結局、家庭内暴力などの理由で離婚したから、ということでした。彼女が希望する相手は、イギリス生まれで自分と同じぐらいの教育があることでした。イングリッシュの白人でもいいけれども、小さいころから自分はムスリムだという基本的認識はあったので、相手もムスリムであることが条件で、それも名目だけのムスリムではなく、宗教を実践しているムスリムであることが条件ということでした。職場には男性が多いが、白人ばかりなのが問題で、パキスタン系との出会いがないようでした。

同じパキスタン系でも男性のほうが結婚は簡単だと彼女は観察しています。自分の親が、娘の結婚に対する（パキスタン系移民）社会のプレッシャーを強く感じていることも言っていました。親は教育に関しては男兄弟と分け隔てなく育ててくれたけれども、結婚に対しては違うと。それから、だいたいお金もためたので自分の家を買いたいが、親は、娘の独立は嫌がると、コミュニティ内の人がうわさする（“People will talk”）、これがいつも親の言うことなのだ、というふうに、経済的には独立していながらも、さまざまな制約を受けていることも話していました。

このように、専門職の女性で、30代に入ってしまうと自分が理想とする男性を探すのが難しいという語りがよく見られました。こうした女性は、パキスタン系での結婚市場で周縁化される傾向が見られます。

次に、仕事について見ていきます。先ほどイギリス国内におけるパキスタン系男性の社会的な地位が依然として低いこととお話ししました。女性の場合も、イギリス人女性は全体的に単純労働

18) Shaw, Alison (2001) “Kinship, Cultural Preference and Immigration: Consanguineous Marriage among British Pakistanis,” *Royal Anthropological Institute (N.S.)* 7: 315-334.; Charsley, Katherine (2013) *Transnational Pakistani Connections: Marrying ‘Back Home’*, Routledge.

働から非単純労働にシフトしていますが、パキスタン系とインド系に関しては、フルタイム就業者の多くは単純労働であることが1994年の調査で明らかになっています。パキスタン系、バングラデシュ系女性に関しては、賃金労働につく率自体が非常に低いことが同じ調査から明らかになっており¹⁹⁾、バーミンガム市で見ると、市全体の女性の経済活動率が52%であるのに対してパキスタン系は21%と、ほかのエスニック集団との大きな差があります²⁰⁾。

パキスタン系のムスリムの女性の就労率が低いことについては、主流社会からは、男女隔離（パルダ）という宗教的、文化的なジェンダー規範が理由とされがちですが、その要因はもっと複合的なものと言えます。

第一には、男女隔離という宗教的、文化的なジェンダー規範があり、第二には、家庭内領域、女性のケア役割を女性たち自身が強く感じているということも、就労率の低さにつながっているといえます。ただし、それ以外の要因もあります。第三は、インド系に比べてパキスタン系、バングラデシュ系移民は家族合流の時期が遅れたことがあります。70年代から、遅い場合は80年代に入ってから合流となり、イギリスが既に不況期に突入し、産業構造も変化していたため女性たちの就業が難しくなったと言えます。第四として、学校の進路指導で、白人の教師がアジア系ムスリム女性に偏見を持っていて、キャリア志向でないほうにパキスタン系の女性を振り向ける傾向があったことも指摘されてきました。

第五として、労働市場での人種、ジェンダー差別が挙げられます。第六に、一世の親の教育資源が乏しく、特にイギリスの教育制度についての知識がないことから、例えば大学進学に必要な資格であるAレベルについても、Aレベルが何であるかを親は全然知らなかった、そうしたことを学校の友達に聞くのも恥ずかしくて聞けないうちに、大学に行かないうちに終わってしまったという人もいました。ただ、ムスリムへのステレオタイプとして、親が女の子を家の外に出さないと思われがちですが、聞き取りしたケースでは、実際には親がもっと勉強して、大学に行きなさいと励ましたほうが多いです。

第七として、女性の労働が非常に見えにくいことも関わっています。例えば、パキスタン系のムスリム女性には内職が多いと言われていますが、そうした労働の見えにくさも、統計上のパキスタン系女性の就労率の低さにつながっていると言えます²¹⁾。

ただ、パキスタン系女性の労働力率は、白人女性と比べれば低いですが、90年代には上昇しています。特に、働かない女性と働く女性の間に分極化が生じてきました。さらに、パキスタン系女性が特定の職種に集中していることが傾向として言えます。

多い職種として、1つは、初等教育レベルの教師があります。非常に女性化された職域で、初等教育レベルの教員あるいは補助教員をやっている人が54名中11名いました。多くは南アジア系移民が集住するインナーシティの学校に勤務しており、仕事の内容は、教員のほかには、白人の教員と第一世代のニューカマー（特に結婚移民としてイギリスにきた女性たち）の親の間でウルドゥー

19) Modood, Tariq et al. (1997) *Ethnic Minorities in Britain: Diversity and Disadvantage*, Polity Press,

20) 工藤正子 (2011) 「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」、竹沢尚一郎（編）『移民のヨーロッパ：国際比較の視点から』明石書店、pp.172-197。

21) 以上について、詳しくは工藤正子（前掲書）を参照されたい。

語の通訳をしたり、親にイギリスの学校制度の説明をするといった媒介的な役割を担うケースが多いと言えます。

それから、就業職種として、もう一つ多いのはコミュニティ・ワーク (community work) という、主にパキスタン系やムスリム系女性のエンパワメントにつながるような仕事です。これは54人中、市やNGOに雇用されてコミュニティ・ワークにかかわっている女性たちが15名いました²²⁾。

この写真は、市職員でエスニック・マイノリティー支援の仕事をしている二世の女性がインナーシティのムスリム女学生たちの野外活動を引率している風景です。こうしたコミュニティ・ワークがなぜ多いのかということを考えてみますと、次の3つぐらいのことが言えるかと思えます。

1つは、コミュニティ・ワークが移民コミュニティの中で「よい仕事」とされていることが言えます。若い南アジア系の女性たちの間で、教職とコミュニティ・ワークが職種として評価が高いことを報告している研究者もいます²³⁾。そこで、パキスタン系移民コミュニティで「よい仕事 (“respectable job”）」というのはどういう仕事かということ、やはり先ほど申し上げたジェンダー規範、バルダが関係しています。つまり、異性との不名誉なうわさが流れないような女性中心の職場であることが挙げられます。または、異性との関係が疑われないよう、周囲からの視線が行き届くような空間での仕事、それから他者をケアするという、パキスタン・コミュニティの中間層の伝統的女性像に矛盾しないような職がよい仕事とされています。こうしたことを背景に、コミュニティ・ワークは、親たちと比べて相対的に高い教育レベルを達成した中間層の二世世代の女性たちが、移民コミュニティの中の女性性をめぐる理念とか規範を逸脱することなく、家の外に出ていって働ける機会の1つとして位置づけることができます。

もう一つの要因としては、マイノリティ女性の持つ資源の格差が、二世世代の女性たちが成長するにつれて顕在化してきたことが言えます。二世世代の公教育への参入や大学進学によって、英語の能力やイギリス社会の知識を持つ女性たちが、そうした資源を持たないニューカマーのムスリム女性たちを支援して、主流社会やコミュニティ、家庭との媒介役割を担うようになったということが言えます。

ただ、近年では、パキスタンから配偶者として呼び寄せられる女性たちも、パキスタンの英語教育の興隆を背景に英語力が高くなっていることと、イギリス側で移民の在留資格のために英語テストを課すとか、その英語テストもインターネットを使ってやらなければいけないので、そうしたことから、呼び寄せる女性の属性が一定程度絞られた結果、余り資源を持たない女性たちは、そもそもイギリスに来られないということになってきたことは補足しておきたいと思えます。

コミュニティ・ワークに就く女性が多い3つ目の要因としては、国の政策として、とりわけ80年代以降、多文化主義政策がとられたことがあります。ある女性は、80年代後期にコミュニティ・ワークをしていたのですが、その背景として、当時はまだ教育を受けた南アジア系の女性が少なく、文化や言語の橋渡しをする仕事の需要が高かったことや、政府に雇用資金があったのが大きか

22) 工藤正子 (前掲書) 参照。

23) Ahmad, Fauzia (2003) *South Asian Women & Employment in Britain: The Interaction of Gender and Ethnicity*, Policy Studies Institute.

ったことを挙げていました²⁴⁾。彼女は、その雇用資金が後で枯渇したために解雇されています。

そのことにみられるように、コミュニティ・ワークは非常に不安定な職種だと言えます。これは、日本の多文化共生にかかわる職員の人たちもパートタイム労働の人が多く、不安定な働き方をしている人が多いようですが、そのこととも共通していると思います。

もう一つ、女性たちの職種として出てきているのが介護労働です。これは、アジア系高齢者専門の介護施設とかデイケアがありまして、そこでの介護労働の需要が出てきています。

去年の夏の現地調査中にイスラームのイードの祭りがありまして、そのときに市内のアジア系高齢者を対象とするデイケア施設でイードのお祭りをやっていました。その施設のマネジャーをしていた女性はパキスタン系でした。施設の利用者の人たちはムスリム、シク、ヒンドゥーで、女性のほうが多く見られましたが、男性もいます。そのお祭りのときには、イギリスの白人の高齢者が数人参加していて、普段はないことらしいんですけども、この日だけ特別に近くのデイケアセンターから来たそうです。こうした施設で二世の女性たちが介護労働をするという需要がふえてきているわけですね。

こうしたアジア系の人たち専用の高齢者施設では、職員の多くはやはりアジア系の人で、マネジメントとか介護スタッフとか料理、運転手など、全てアジア系の人が入っていました。幾つか訪ねたのですが、殆ど全てのスタッフがアジア系で、もっとも、パキスタン系だけではなくていわゆる南アジア系の人で、男性もいますが、現場スタッフには女性がどちらかというと多いような感じがしました。こうしたアジア系専用の高齢者施設は一世の高齢化が始まった1980年代の後期ぐらいからふえてきたようです。

最初は出稼ぎに来てやがて帰国すると思っていたアジア系移民が、そう思いながら結局はイギリスで老後を過ごすことになるという、いわゆる「帰還神話」²⁵⁾と呼ばれる現象が起きてきました。そうした人たちが、80年代になって、ここイギリスで年をとっていくんだと思い始めたころに高齢者介護の需要が出始めたということ、ある移民支援組織の男性が言っていました。

イギリスの政策の側に、アジア系は家族の世話は（福祉に頼らず）家族でする人たちだ、というステレオタイプがあったこともあり、アジア系高齢者向けの福祉政策もなかなか進んでこなかったけれども、実際には二世が就業して家を離れたり、転勤が多いとか、専門職につく人たちも出てきました。あと、拡大家族の居住形態も変化してきたり、経済的な不況の中で女性も働きに行かざるを得ない状況の中で、アジア系高齢者の公的ケアの需要が出てきたということがあります。

ただ、こうしたアジア系専門の介護施設ができてきた背景には、宗教的、文化的な理由（例えば、ムスリムのためのハラール食等）もあるんですが、一世の、特に（外で働くことが少なかった）高齢女性たちには英語が十分に話せない人が多いという言語の問題があります。二世になるともう英語がしゃべれますので、こうした需要はなくなるであろうとも言われていて、アジア系専門の介護施設の出現は過渡的な現象であろうと言う2世たちもいます。もう一つは、国の福祉政策の力点が今、施設での介護から家族やコミュニティでのホームケアに移行していることから、今後は

24) 詳しくは工藤（前掲書）、186頁を参照されたい。

25) Muhammad Anwar (1979) *Myth of Return: Pakistanis in Britain*, Heinemann Educational Books.

介護労働の中での需要のあり方も変わってくるであろうと言われています。

介護の現場を見ていて1つ気がついたのは、こうした場所でエスニック境界を維持、強化するような語りが見えることです。1つは、施設の側でアジア系としての共同性を強調する、私たちはみんな「エイジャン」だからとか、昔は同じインド亜大陸で住んでいたんだからとか、そうした語り方が見られます。

白人のイングリッシュと自分たちを差異化するような語りもみられました。アジア系は高齢者をデイセンターに送ったりしないで、家族で世話するという語りは、(政策側だけでなく)アジア系自身の側にもあります。一方で、アジア系の内部でも介護のあり方を通して差異化する語りがあります。例えば、パンジャブ系の人が、ミールプール系の人たちは自分の親がこうしたデイケアセンターに来ることを嫌がるだろうと。なぜなら、親を自分でみないことが彼らにとっては文化的に屈辱的なことで、そういうふうには、(公的福祉に対する)ミールプールの人たちの意識は「遅れて」いるので介護に対しても違う姿勢を持っているのだ、というような語りです。

こうした介護の仕事についている人たちは、マネジメントの人を除いて二世は少ないようです。ぱっと見てやはり多いのはニューカマーです。それから、工場労働をしていたが、工場が近年閉鎖されてほかに働くところが見つからない人が介護労働につく傾向もみとれます。

それから結婚移民のニューカマー女性-結婚のためにパキスタンからイギリスに来た人-にも介護労働の現場で何人か会いました。

それから、介護労働は非常に条件が悪い仕事であるという認識もみられます。60歳代で介護施設で働いていた女性は、私の年代では介護職の人はいるけれども、若い人には人気がないと。ここに見習いに来た人もいるけれども、結局、介護職についた人はいないと。介護は汚い仕事とされていて、あなた自身だって、こんな仕事をしようと思わないでしようと言っていました。このように、非常に周縁的な仕事であると認識されている一方で、需要はあるので、工場などからこうした仕事にシフトしてきている傾向が見られます。

継続と変容

結婚に関しては、既存研究の中には、女性は教育レベルが上がるほど主流社会に同化して、いわゆる伝統的な結婚を拒否するという分析もあるのですが、見ていますと、女性たちの結婚をめぐる変容の仕方はより複雑であることが言えます。

確かに移民集団内部での結婚が今でも多数派で、それによってパキスタン系、あるいはその中でエスニック境界が維持、強化されているのですが、一方で配偶者選択については、当事者の女性たちの発言権が拡大しています。

1つの事例として挙げたいのは、パンジャビーの女性がミールプーリーの男性と結婚した事例です。その父親によれば、彼女はミールプーリーの友人とフェイスブックを通じてつき合いが始まって、求婚されて結婚したそうです。父親は、最初は反対したそうです。理由は、相手の家はインナーシティのよくない地域にあると。彼らはパンジャビーなんですけれども、相手の親はミールプーリーで、家族の環境が大きく違うと。娘が相手よりも、彼の家族とうまくいかないのではない

かと心配したそうです。

でも、相手が諦めきれないで、娘も申し入れを受け入れて結婚したそうです。父親は、今、彼女は私たちが心配したとおりのことを順番に経験していると冗談めかして話していましたが、一方で、相手はミールプーリーだけれども、海外に仕事で出てもいるので、私たちが思うミールプーリーという、非常に閉ざされたコミュニティではなくて、もっとオープンな人だとも言うていました。

相手の親は、結婚式の後、ほかの参列者から、どうしたらああいう教育を受けた娘を嫁に迎えられるのかと聞かれたそうです。大体彼らミールプーリーはパキスタンから教育程度の低い嫁を迎えるので、ということでした。相手の家はバレールヴィーというスーフィー寄りのイスラームの派な人だけれども、うちはずっと、クルアーンとかハディースというものに即したデーオバンディー派であるとも言っていました。これも結婚を反対した理由の1つで、バレールヴィーのほうが文化的、習慣的なことをいろいろやるが、わたしたちデーオバンディーは違うんだと。結婚式のビデオも見せてくれましたが、このビデオを注文したのは相手の家なので、後ろに流している音楽の趣味とかもあっちのもので、自分たちだったら選ばなかったような音楽を選んでるという苦笑いをしていました。

こうした語りに反映されているように、宗教やエスニック集団間の境界が維持されているのですが、結婚相手の選択では、若い女性のイニシアティブが、ある範囲の中で許容されるようになっていえる。こうした変化がみられる一方で、夫婦間の性別役割分業については、依然として女性のケア役割がパキスタン系あるいはムスリムの女性性として重んじられており、女性たちが仕事を始めても大きな変化はなく、主な稼ぎ手としての夫と、家の中を担う妻という明確な性別役割分業の意識は変化しておらず、女性たち自身がそれをイスラームの規範として正当化する傾向は強く見られました。

ケアに焦点を置く家庭内役割の遂行によって、女性たちが主流社会の白人である「イングリッシュ」とのエスニック境界を強化している場面も見られました。例えば、母親が台所でローティー(*roti*)²⁶⁾を焼きながら「ちゃんと習っておきなさい、あなたの文化なんだから、イングリッシュはローティーの作り方なんか知らないのよ」と言っていました。こういうふうには家事をとおしてもエスニック境界が強化されています。

ただし、若い世代や共働き世帯の中では、性別役割に対する認識は少しずつ変化しています。介護というケアに関しても女性役割が交渉されているということもいくつかの例から見ることができました。ここはちょっと割愛します²⁷⁾。

26) 全粒粉でつくる無発酵の平たいパン。

27) 詳しくは以下の文献を参照されたい。工藤正子(2014)「多文化社会のケア、エスニシティ、ジェンダー：英国パキスタン系移民の高齢者介護の事例から」、『現代社会研究』Vol.17、京都女子大学現代社会学部紀要、pp.81-94。

新たな共同性の構築

最後に、移住状況が進むなかで、新しい共同性がどういうふう構築されているかということを見たいと思います。今までコミュニティ・ワークとかアジア系に特化した介護労働を見てきました。そうした職業的实践によってエスニック境界が強化されている一方で、幾つかの新たな実践も見られましたので御紹介したいと思います。

まず、コミュニティ・ワークをしているAさん、30代女性の例を挙げます。この写真は彼女の設立した組織での催しの集まりの写真ですけれども、彼女はアートを通じた社会変革を大きな目的として国内外で活動しています。

活動の手段としては、社会的、文化的、経済的理由から声を奪われてきた人々、特に女性が自信を獲得して自己を表現する手段としてアートを推進しています。主体はムスリム女性ですが、異文化間あるいは異宗教間の活動を通じて創造的実践をすることに活動の力点を置いています。既存の文化的、宗教的な境界を越えて、不利益をこうむっている社会的存在のエンパワメントを目指していて、草の根レベルから社会の変革や連帯を目指す試みをしています²⁸⁾。

去年の夏にオフィスを訪ねたときには、ムスリムの女性と「ジプシー」のルーツを持つという白人の女性が一緒に働いていました。この写真では、これは異宗教間を結ぶ試みで、ほとんどはパキスタン系の女性たちですが、一番奥にいるのは、イングリッシュの白人女性でキリスト教の教会で仕事をしている人が一緒になってイベントを開催しているところでした。

次に、私的領域での新しいネットワークの生成として御紹介したいのはBさんの事例です。Bさんは30代で、専門職で未婚です。働いて蓄えができたので、自宅のすぐ近くに家を購入しました。親は（世間体を気にして、独身の娘の一人暮らしを）すごく嫌がりましたが、何とか説得しています。海外出張も多数回、経験しており、海外に友人もいます。海外旅行もかなり頻繁にしている女性です。

去年の夏に彼女の家で参与観察したことを御紹介します。彼女の兄の大学時代の男友達がヒンドゥー教徒で、ある都市の企業に勤めています。その人が、去年の夏、知り合いの結婚式の出席のために奥さんと10代の子どもたちとバーミンガムに来たので、その機会を利用してラーキの儀礼(*Rahki ceremony*)をやることになりました。

この日たまたま私は彼女とアジア人街に行っていて、一緒にどうぞと言われたのでその儀礼を見ることができました。その日は、Ladypool Roadというアジア人街でこのラーキという儀礼用の紐を買って、その後、相手はヒンドゥーの人たちなので、グジャラート系のベジタリアンのお店でテイクアウトの料理を買って食事の準備をしました。儀礼は、彼女の家で、お兄さんの大学時代の友人である男性、その奥さんと子どもたち、そして、Bさんの両親ほかの家族が参加して行われました。

この儀礼は、私はヒンドゥー儀礼について詳しくないので間違ったことを言っていたら教えてい

28) 以下文献の192頁を参照されたい。工藤正子(2011)「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」、竹沢尚一郎(編)『移民のヨーロッパ：国際比較の視点から』明石書店、pp.172-197。

ただきたいのですが、通常は男兄弟と姉妹の間で行われる儀礼で、姉妹のほうが男兄弟の手に紐をつけてあげて、あと儀礼専用のカードなどもあって、そのカードをあげたりもするようです。Bさんは、これはヒンドゥーの儀礼なんだけれども、たまたまこ最近では2年ごとに会って、この儀礼をやっているということでした。

イギリスで移民二世のムスリム女性がヒンドゥー男性とこうした儀礼をすることをどのように理解できるかということですが、既存研究の中では、進学と就労によって経済力を獲得した第二世代の女性たちがイギリスのディアスポラにおいて自分たちの文化的実践、例えばダウリーという結婚の文化的実践を強化していくというプロセスが報告されてきました。Bさんの場合は、この彼もパンジャービーで、会話はここでは英語とパンジャービーと両方でされていましたけれども、「パンジャービー」としての既存のカテゴリーの再確認だけではなくて、ディアスポラというコンテキストにおける境界の再編と新たな共同性の構築の試みが見られるのではないかと思います²⁹⁾。それは擬似家族化による関係形成という、アジア系として共通の文化的資源を動員しつつ、本来ならば境界が設定されている異宗教間、および非親族の男性との関係形成、男女隔離のルールを交渉していると言えるのではないかと思います。双方の家族を巻き込んで、こうして社会的ネットワークが再編されていることが言えるのではないのでしょうか。

もう一つは階級的な要素で、これは大学に進学した女性によって可能となった社会的なネットワークであり、もう一つは、彼女自身が購入した家という自律的な空間で、この儀礼を実践していることも1つの特徴としてあるのではないかと思います。こうしたことから、アジア系2世の新興のミドルクラスによる共同性の構築の一例がこの儀礼に読み取れるのではないかと考えました。

まとめと考察

では、まとめに入ります。イギリス社会におけるパキスタン系ディアスポラの世代交代が進む中で、中間層の第二世代の女性たちは、高等教育への参入や就労を通して親世代からの階層上昇を遂げています。しかし、彼女たちは、イギリス社会ではジェンダー、宗教、人種化によって周縁化され、また、移民コミュニティ内部では理想的な女性性に依拠する親族の名誉の維持という文化規範によって、男性と異なる制約も受けてきました。

そうした多重の周縁化や制約の中で、女性たちは主流社会や移民コミュニティでの自己の位置を注意深く交渉しています。教師やコミュニティ・ワークといった女性化された職種への集中の傾向は、ブリティッシュネス (Britishness) を主張しつつ、宗教的、文化的なジェンダー規範の範囲内でムスリム女性としての威信を獲得しようとする複雑な交渉のプロセスの一部として見るができるのではないかと思います。

また、コミュニティ・ワークには、アジア系ムスリム女性としての多重の周縁化の過程で生じてきた、女性たちの政治的主体の形成も認めることができます。そこには従来の世代間の葛藤とか主

29) インド内において、このようにムスリムとヒンドゥー教徒の間でラーキの儀礼が行われる事例がどれほどみられるのかはわからないが、少なくともムスリムが圧倒的多数派であるパキスタン内においては、まずこうした事例は見られないであろうと思われる。

流社会への同化という単純な構図には収斂できない、マイノリティ女性の自己像の多面性やダイナミクスが見られます。

言語的、文化的な資源を動員して可能となる、こうしたコミュニティ・ワークや、近年のアジア系高齢者に特化した介護分野への参入は、複数の言語や文化を資源とする二世の女性たちの強みであると同時に、その一方で、公的資金の動向に左右される脆弱なものであるとも言えます。こうして公的領域における第二世代の女性たちの活動には可能性と制約の双方を見ることができます。

第二世代の女性たちの私的領域に目を向けてみれば、結婚や家庭内での性別分業のあり方もまたアジア系、パキスタン系としての女性性を維持、強化し、ほかのエスニシティ集団との境界を維持しているとも見ることもできるかもしれませんが、彼女たちの結婚やケアの実践には、それぞれの立ち位置によって多様な交渉の実践を見ることができます。

さらに、最後の2つの事例で示したように、状況に応じて自らの持つ文化的な実践を動員することで、制約の中で既存のカテゴリーを超えた共同性を立ち上げる試みも見ることができます。こうした境界の横断が、現代イギリスにおける多文化主義の言説をめぐる変化といかに絡み合い、今後の彼女たちの意識のありようや日常の社会的ネットワークの再形成に結びついていくのかを注視していく必要があると思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございました。詳細な事例を整理してお話をさせていただきました。

—質疑応答—

○司会 ここからは自由に御質問やコメントや討論の時間にしたいと思います。どなたからでも構いません。挙手いただけますか。

○質問者 A 最初にちょっと技術的かつ瑣末な質問をしていいですか。私もインタビュー調査興味あるんですけども、幾つかいろんな声が紹介されてて、その声の持ち主の紹介の部分に何かME 2001とかああいうの書いて、あれは何ですか。

○工藤 名前をコード化したものと、何年にインタビューしたものかを示すものです。

○司会 私からよろしいですか、1つ。ちょっと大ざっぱな質問なんですけど、うまく伝えられるかわからないですが、御発表の中で家族という言葉が何度か出てきて、南アジアの文脈で最初に核家族ってやっぱり思い浮かべないわけですね、親族集団と、そういうリネージにせよ、あるネットワークの中に組み込まれていてという、それは結婚にしてもそうだと思うんですけど、興味深い最後の事例とか……1回ばらばらになって核家族化してこういう営みが出てきてるという状況なのかなと。つまり、最初にイメージするときに、かなりイギリスでの生活の中で単位がばらばらなのかなというか、うまく伝えられないんですが、例えば結婚の悪いうわさが立つからみたいなの、ある種のコミュニティ性があるようにも見えるんですけども、もし最後の事例みたいな場面が実際あるとしたら、多分、親族集団とかいところが出たとか、奥さん来てやるように見えるけど、意外と家族同士のふうにも見えて。

家族というのは、実際、結構、親戚同士が身近にいたりとか、つき合いがあったりとかいうくら

いネットワーク性があるのか、意外とばらばらに生活してて、親戚同士とかが時々会うくらいなのかというので、ちょっとその辺の感じがよくわからなかったんです。

○工藤 これも語りから読み取るしかないんですけども、パンジャービーの人が言うのは、私たちは割と核家族だけでイギリスで住んでいると。一方で、ミールプリーの人たちは拡大家族とか、家族のより広範なネットワークが強いことを強調し、私たちパンジャービーは（核家族が単位となって）相互に擬似家族化したような親族ネットワークをつくる傾向があり、彼らミールプリーのネットワークとはかなり違うんだと言っていました。ただ、このBさんの事例でも、この写真の背後には彼女のお父さんとか、お姉さんとお姉さんの子どもたちとか、兄弟、ある範囲の家族はいるわけです。

○司会 そうですね。ありがとうございます。

もうちょっと言うと、あるいろんな、例えばパンジャービーでも何でも、イメージとしてのカテゴリーと、実際の例えば親族のつながり、実際にネットワークがあるのとではやっぱりちょっと違うのかなと思って、その辺をちょっと聞こうと思ったんですけども。ありがとうございます。

ほかに御質問お願いします。

○質問者 A 大変詳細な研究でおもしろく聞かせていただきました。

それで、第二世代のアイデンティティをめぐる語りのあたりで出てきたお話ですけども、具体的に言いますと語りの14、15、16あたりだったと思うんですけども、御紹介された語りの中に、自分はパキスタン系ではなくてムスリムだと思いう語りがあったと思うんですけども、そういう語りが出てくる文脈ってどういう文脈なのかちょっと知りたくて、つまり自分の出身地でタグづけされることは拒否して、イスラムという、しかも伝統というよりもむしろ宗教としてのイスラムに自分をアイデンティファイするという第二世代が出てきてる文脈は、しかもそれがイスラムフォビアの今日の中でそういう語りが出てくる文脈といたらどういう文脈なのかをちょっと教えていただければと思います。

○工藤 それは非常に複雑で、私も把握し切れてはいないと思うんですけども、1つには多くの第二世代にとって、パキスタンという実際の場所と自分を結びつけるものはもうほとんどないということが1つあることと、それから特に9・11以降のそうした政治的な風土の中で排斥される中で、ムスリムとは何かというものを自己で問い直していくような動きで、パキスタン系として自己を名指すのではなくて、ムスリムとして、しかも主流社会からのステレオタイプとしてのムスリム像に対抗するかたちで、宗教的な基軸を自己の定義に据えていく動きが出てきたといえるのではないかと思います。そうした過程で、イギリスのブリティッシュ・ムスリムというカテゴリーが形成されていくコンテキストが特にテロ以降でできたということが1つ言えると思います。

○質問者 A そのブリティッシュ・ムスリムというアイデンティフィケーションというのは新たな共同性ということだと言えないんですか。

○工藤 それも1つの共同性ということが言えると思います。1つの政治的なスタイルでもありませんし。

○質問者 A そういったときのブリティッシュ・ムスリムというのは、特に南アジア出身者には限らない。

○工藤 はい。ほかの中東出身者の人もいますし。

○質問者 A はい。ありがとうございました。

○関根 いいですか。ちょっと4点ばかりお聞きしたいというか、まず調査が非常に、2006年から毎夏行ったとしても、そんなに長い期間ではないのに極めてきちんとやられてて、まずそれが印象的で、私も見習いたいですけど。私もロンドンを中心に南アジア系のヒンドゥー側からやっているので、私が知らないことが非常に細かくわかって、とにかくありがたかったという感じなんですけど。

ちょっとお聞きしたいのは、まずバーミンガムに私は、さっきも言ったけど数日しか行ったことないんですけども、私がロンドンで借りていた大家さんに、あしたから少しだけバーミンガムに行ってくるって言ったならば、その大家は、イングリッシュチャーチの頭がちがちの牧師さんで、おまえは何でいつもそういうイギリスじゃないとこ行くんだと言うんですね、ああ、こういうふう言うんだなと思ったんですけど。つまりバーミンガムはイギリスじゃないんですね、そういう方たちからすると。その人の家はいつもエリザベス女王の肖像がかかっていますけれども、特殊な人ではあるけど、1つの極の意見。

それを逆に言うと、バーミンガムの人はそのようなまなざしを知ってるわけですから、きょうはちょっともうバーミンガムから入ったので、レスターとかマンチェスターとか、ほかも調査されてると思うんですけども、きょうのお話を一般化というか比較するときに、やっぱり都市が違うとちょっと違う、つまり今日ちょっと印象的だったのはイングリッシュに対する抵抗の言説というか、排除されてるから逆に排除し返すと考えていいんでしょうかね、きょうの語りは。つまりちょっとバーミンガムの特殊性という、特殊性は言い過ぎですけど、イングリッシュワールドの中での周縁性を担ったバーミンガムの一種の固有性が語りにやっぱり反映してるという感じですか、そうでもないんですか。ちょっとこれ1つ目の質問ですけど。

○工藤 確かにバーミンガムの、パキスタン系の集住が進んできたというコンテキストならではのイングリッシュに対する対抗的言説ということは言えて、それは多分、南部のボーンマスで、市の0.1%しかパキスタン系がいないところではそういう言説は生まれ得ないと思うんですね。

例えば、あるバングラデシュ系の男性が、ボーンマスに親戚がいて行くんだけど、ボーンマスに行くとき非常に居場所がないと、バーなんかに行っても、とても居心地が悪いということを言っていて、コンテキストは全く違い、エスニック境界の引き方も全く違うということがあると思います。

○関根 つまりバーミンガムのホワイトとバーミンガムの、例えば、大ざっぱに言うと南アジア系というのは、ある種のバーミンガムという都市を共有してるという面ではある連帯感が多分なくはないと思うんですね、今日では。もちろんそこに差異はあるわけです。

ただ、ちょっと半分ひとり言ですけど、つまりイングリッシュって分けるときにどのイングリッシュなのかという、そういうバーミンガムのイングリッシュとそのアウトサイドというのが。ちょっとこれはいいんです、ただ、そういうことがちょっと気になったというだけで。

それから2番目は、きょうのお話で一世から二世への展開って説得的にすごくよくわかったんですけども、二世から三世がまた違うというのもきょうのお話からすごく感じられたんですけど、そ

これは老人介護のところの、この現象は一種の一世が年とってきたの過渡的な現象だというお話ともちょっと関係するんですけど、きょうのような状況は、二世が三世になって、三世がもっと成長してきたときにかなり変わってくるという感じを受けたんですけど。

○工藤 介護に関してですか。

○関根 いや、介護だけじゃなくて全体的に。きょうの自律性の問題にせよ、交渉の資源とかネットワークとか、調査をされてそういう感じですか、何か変わりつつあるというか。きょうは割と二世が主語の話と聞いていいんですか。

○工藤 そうですね。私が知ってる三世の人たちは大体今中学生ぐらいの人が多くて、それは多分イギリスの中の全般的なステージとしてそのぐらいの人が多いいと思いますので、そういう人たちが。

○関根 いや、いいんですけど、きょうの話で私がすごく勉強になったのは、その差が割とはっきり見えてきたというか、一世を主語にしたときと二世を主語にしたときと三世を主語にしたとき、これ、かなり気をつけて我々も調査しないといけないなということをきょう思いました。そういうことでちょっと確認。

3番目は、イトコ婚はムスリムだから多分平行イトコだと思いうんですけども、これももちろんいわゆる人類学で言う分類的な、クラシフィケートリーないところですよ。

直のいとこではなくて、探し方としては。つまり又いとこもいとこ、一種のカズンマリッジに入る。……じゃないか。この文脈では割と直接というか一番近いいとこなんですか。

○工藤 そうですね。指しているのは近い、実際のイトコのことを指すことが多いんだと思います³⁰⁾。

○関根 それを呼び寄せるのが一番理想なんですか、やっぱり。

○工藤 それは、親世代にとってはパキスタンとの関係を維持していくために、向こうの親族との縁組をするケースが少なくないと言われています。それから向こうの親族に対する義務感みたいなものですよ。イギリスとの結びつきは大きな資源なので、それを自分たちだけではなくてパキスタンの親族にもそれを共有することがすごく重要視されているということはあると思います。

○関根 そうすると、二世にとってこの結婚の制約というか規定婚的なものというのはやっぱりすごく現実的なんですか、探し方としては。

○工藤 二世の女性たちが言うのは、イトコ婚でなければいけないということは全くないです。インターネットの結婚紹介サイトなどで大体指定できますよね、宗教だと、希望として、すごく宗教的、ちょっと宗教的、余り宗教的じゃないみたいなレベルを選んで、そのチェックをしていって、そういう基準で自分の好みの人を見つける。自分の好みというのは、やはり個人の境界がイングリッシュの人とは違うので、家族で合意の上ということはあると思うんですけども。

○関根 じゃあ、かなりインターネットというか、そういうので本当に直接連絡して。

○工藤 かなり一般的です。あと結婚のエージェントですね。

○関根 インド自体が今、そうなってますからね。だから、それほど違いはないでしょうけど。

30) 第一イトコが選好される傾向が指摘されている。例えば、Charsley (前掲書) の88頁を参照されたい。

ちょっと長くなって申しわけないけど、これは2点目の質問と関連するんですけど、最後の結論に近い新たな共同性というのは非常におもしろいんですけど、ここで2点事例を挙げてるんですよね、アートによる社会改革と、家族がかかわるような習俗を擬似的に使って交渉するという、この新しい共同性と一応、今、名指してるものは、当然ながら拡大していくというイメージでしょうね。

○工藤 かなり選別的なものではあると思うのですが。

○関根 これ、ミドルクラスがふえてきてるからかなり一般性のある議論だとは思いますが、やっぱりそこからまたこぼれてる人たちもいて、そういう人たちは交渉能力は非常に低い。それが分極化してきてる。

○工藤 はい。大学に行ってなくて既婚の女性がBさんと同じことをやるのは考えられないと思うんですよね。ですので分極化はかなりいえると思います。

○関根 インタビューの対象者の選び方ってなかなか、私もやって、もういかにインタビューの相手が会ってくれないかという経験は、私もロンドンで何回電話しても会ってくれないんですよね。だから、これだけ会ったことにまずすごい感心してるんですけど。だから余り欲張ったこと言えないんですけど、割と分極化の下のほうにいた人たちには余りインタビューはしてない。

○工藤 そうですね、できないというか。

○関根 そうですね。どうもありがとうございました。

○質問者B オーストラリアのことを研究している者ですけど、質問があるのはレジメの3枚目の3-7のブリティッシュまたはブリティッシュ・ムスリムという自己のところですけど、このブリティッシュあるいはブリティッシュ・ムスリムというのは、聞いた方々が実際に発した言葉なのか、それとも先生がたくさんのお話を聞いて……化というか名づけられた言葉なのかなという1つ疑問がありまして、というのも、オーストラリアでもいろんな人にお話を聞いてて、自分は例えばエジプシャンバックグラウンドのオーストラリア人だとか、あとはレバニーバックグラウンドのオーストラリア人なんだとか話してくださる人はいるんだけど、エジプシャンオーストラリアンだとかいう言い方は余りされなくて、ちょっと興味を持ったので質問させていただきました。

あともう一つ、これに関してなんですけど、このブリティッシュまたはブリティッシュ・ムスリムと先生は意図的に分けておられますが、これもまた使い方によって、正確に言うとか何か違う点があるのか、それともこの2つはイコールとして考えた方がいいのか、どうなのかなと思いました。お願いします。

○工藤 これは、あなたは自分のことをどういうふうに定義しますかという質問をしたときに、「ブリティッシュかな、ブリティッシュ・ムスリムかな」という彼女たち自身の言葉です。

ブリティッシュとブリティッシュ・ムスリムの違いは、やはり宗教がその自己定義の中にどのぐらい強く要素として入ってくるかどうかによって、ただ単にブリティッシュと規定するのか、ブリティッシュ・ムスリムとして規定するのか、あるいは状況にもよると思うんですけども。

○質問者B わかりました。

○司会 ほかに御質問。はい、お願いします。

○質問者C ありがとうございました。今の御質問ともちょっと絡むかもしれないんですけど、

アイデンティティをめぐる語彙がたくさんありますよね。先ほど言われたポイントもそうですし、パキスタン系というタイトルにもある言葉や、あとは途中の福祉施設のお話が出てくるあたりでアジア系、エイジアンというような、何かその使い分けのポイントであったり、この局面ではこういうものがという、何か実際フィールドワークされてその切りかえのポイント、当然、関根先生が言われたような世代もあると思うんですけど、何か使い分けを、切りかえるポイント、どういう境界とそのとき意識してるかというポイントとも絡むかなと思うんですけど、そのあたりはどういうふう考えたらいいでしょうかというのが、どういうふうに理解すればというか、先生がふだんからフィールドワークされてて何か思われるところとか、割とふだんからこうしたものはもう本人の中ではごちゃごちゃしてあるもので、その局面に応じて選ばれてるのか。それが特に福祉施設とかビジネスとかの場であれば、パキスタンとかくくよりはもっとより大きな対象も含めたアジア系が選ばれてるかなとか、そういうのは予想がつくんですけど、そうしたことがもし何かあればお伺いしたいというのが1点です。ほかにもちょっとあるんですけど、まずその点お伺いできれば。お願いします。

○工藤 難しい御質問で。

○質問者 C 済みません、空気読めてなかったかもしれないですが。

○工藤 いえ、そういうことではなくて、すごく重要だなと思うんですけども、例えば、エイジアンという呼称が、当事者にとってどのように使われているか、ということですよ。

○質問者 C はい、当事者にとって。

○工藤 当事者がそれをどうやって使うかということですけども、それはかなり状況的な違いとか戦略的なこととかが絡んでくると思いますよね。私も何かエイジアンに入れられたこともありますし、だから、エイジアンというのがどういうコンテキスト、どういうものを指して言われているのかというのはかなり伸び縮みするものだということは言えると思います。

○質問者 C その部分と当局間の、私、移民と監視みたいなのに、日本のほうですけど、関心があって、やっぱりそうした当局での名指しというか、いわゆる上からのというか、そうしたカテゴリー化みたいなもの、分類化みたいなもの、当事者がどういう形で向き合っていたり、そういう部分と重ね合わせながら、どういった形でこうしたカテゴリーがかかっているのかということにとっても関心があるもので、そういう聞き方を私ちょっとさせていただいていたんですけど。どういった、例えば、こういうときに本当よく言われるのが、規範的によい、途中コミュニティ・ワークのお話がありましたけど、包摂策に乗ってくる、いわゆるよいマイノリティというか、よいパキスタンというか、よいアジア系、悪い、それに乗ってこない人々がいることは恐らく予想がつくんですけど、その部分とかともあるいはかわるのかなと。半分感想みたいな質問になってしまって恐縮なんですけれども、どう考えたらいいのかという。

○工藤 ありがとうございます。

○関根 ちょっといいですか。今のと、先ほどの鈴木さんの質問、ちょっと全部私の中で勝手に関連させたんですけども、ちょっと私のアイデアを勝手に言いますけど。

○工藤 お願いします。

○関根 つまり、ここでは新たな共同性という言い方が非常にポイントで、もちろん工藤先生はそ

れを意識、既にしてるわけですけど、そこをちょっと私、単純化して言うと、共同性とただ言ったときは、やっぱり一種のムスリムであることを、いろんな外部の、9・11以降のそういういろんなインシデントがあってそう言わざるを得なくなる、外からも内からも、私はここに所属してるんだということを決めちゃうみたいなの、要するに所属ないしは定着させるような言説としての共同体が1つ厳然としてありますよね。

だけど、それに対して、最後、新たな共同性と言いたいのは、やっぱりもっと生成的な、いろんな状況の中で、交渉という言葉が使われてますけど、交渉し生成して、強く言えばクリエイティブなそういう場の構築みたいなのを、それは所属でアイデンティティを決めるんじゃなくて、作り出すアイデンティティとか、それを指したいんだろうなという、そういう理解の仕方でもいいのかどうかというんですけど。

これはもう一つ、鈴木さんが最近出した本で、くくりとつながりということをつけて、くくりとつながりによってできるまとまりとくくりを分けたんですけど、それとほぼ対応してて、所属で決まる共同性とかアイデンティティはくくりですよ、定義の論理が働いてる、それに対して、新たな共同性のほうは、いろんなつながりをたどってある自分の生きられる場のまとまりをつくるという、そういうふうにと考えると割と理解しやすいのかなと。

それで、もう一つ言うと、じゃあ、何で、ただの共同性が語られなきゃならないかって、やっぱりこれも必要なんですよね。つまり新たな共同性をつくるために、ちょっと堅めの殻のくくりの共同性が時にはうまく使うと防波堤になるわけですよ。そこにクリエイティブな空間をつくる、一応壁をつくってからつくるといって、それも一種の資源、俺はムスリムだということが1つの資源として働くことによって生成的なアイデンティティをつくる場をつくらと考えるか。双方は2つに分けるだけじゃなくて、実はこれ入り組み合ってるというのはちょっと私の勝手な妄想的整理ですけれども。

○工藤 今の先生のお話をきちんと理解できたかどうかはわからないんですが、そうしたネットワークのことを考えて思い出したことがあります。Bさんが個人的に問題を抱えた状況になったときのことを話してくれたことが何度かあるんですけども、例えば仕事で鬱になって何カ月か治らなかつたときに、どういう人に助けてもらったのか聞いたら、それは家族には言わなかつた。同じアジア系の、インド系だったか、ムスリムではない友達がいて、そういう人と定期的に会って話したりとか、そういうことがすごく役に立ったと言ってるんですね。

ですから、常に属する場はあって、それは彼女にとっては主流社会からの差別から守ってくれたりとか保険になる重要不可欠なところなんだけども、そこは危機的な状況になったときにいつも助けてくれるところではなくて、そのほかの場と補足的なネットワークを動員しつつ、自分の固定的な場に生きていくということなのかなと思いました。

○関根 それはすごいおもしろいですね。

○司会 きょうは一応6時までですが、もう少し部屋をとってますので、御質問があれば。

○質問者 D 済みません、よく似た話かもしれないんですけども、このBさんの場合は2年ごとに儀礼を繰り返している。それから、例えば5ページ目の真ん中とかで、伝統的女性像に矛盾しないようなという……のところとか、それから6ページの明確な役割分業をイスラームの規範とし

て語られ正当化される傾向、それからローティ어의つくり方とかいろいろ言ってるんですけど、これって自分たちで自分たちの規範を規定していったって、例えばこんなふうには2年ごとに開かないと自分たちのあり方、パキスタン二世の人のあり方が維持できないからしてるのかなと、だから共同性を築けないのかなと思って聞いてたんです。

それで、まとめと考察のところ、最後から4行目のところで、制約の中で既存のカテゴリーを超えた共同性を立ち上げる試みも見ることができるという、この既存のカテゴリーを超えたところなんだけど、この既存のカテゴリーに加えて超えるというよりか、既存のカテゴリーから離れることができずに新たに築いていく。だから今も1つのコミュニティがあって、ここからまた違うところで自分の悩みを打ち明けたりしてるみたいなの、だからうまく使い分けている部分なんですよ。

一方で、自分たちパキスタンの行動を規範しつつも、もう一方では、規範してる部分を超えてほかの人たちとの交わりで規範していったってというふうには、これからというか、何かちょっとこのまとめの、今おっしゃってるようなコミュニティを持って別ところにそういう場所を持つてるといのはちょっと違うんじゃないかなと、ふと思いついて聞いてたんですけど。これは意見でも何でも、私の感想で申しわけないんですけど。

○工藤 ありがとうございます。

○質問者 D すごくおもしろいというか、いろんな方にインタビューとられて、本当に、さっきからおっしゃるように難しかったですし、対象の偏りはあろうとも、ここまでいろんなことを話してくれるという状況はすごく困難なことは理解できますので、おもしろい研究だなと思ってずっと聞かせてはいただいたんですけど。

最後のこのまとめと実際のこの彼女たちの語りとか何かちょっと齟齬があるような感じはしたんですけど、そのあたりどう、これから考察していかれることでしょうか、ちょっと思ったんですけど。どう答えていいかわかりませんよね。ごめんなさい。

○工藤 いえ。先ほどの関根先生からの御指摘にも関係があるところで、既存のカテゴリーと新しい実践というものがどういう関係性にあるのかということ考えたときに、単に既存のカテゴリーを超えるということではなくて、相互のもっと複雑な関係性というものをこれから考えていきたいと思えます。大切なところを御指摘いただきましてありがとうございます。

○質問者 D それともう一つ、4ページ目の、これは全くの事実関係ですけど、就労のところの2で、家庭領域での女性のケア役割というのは、これは専業主婦としての女性の家族の世話とか子育てとか家事とか、そういうケアなんですか。

○工藤 4ページの。

○質問者 D 4-3の就労の(1)の下に8番目まであると思うんですが。

○工藤 この2番目。

○質問者 D ええ。2番目のこのケア役割というのは、ただ家族の家事をするとか専業主婦とかそういうことですか。

○工藤 家事、育児、介護全てのことです。

○質問者 D 介護まで。わかりました、済みません。

○司会 どうでしょう、もう一、二個あれば、御質問。よろしいでしょうかね。

○質問者 E 済みません、最後というか、せっかく、映像とか拝見できればと思ったんですけど。リクエストみたいな感じで恐縮なんですけど。

(ビデオ上映)

○司会 どうもありがとうございました。

【工藤正子氏の主要著書・論文】

1. “Forging Intimate Ties in Transnational Spaces: The Life Trajectories of Japanese Women Married to Pakistani Migrants”, *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-states* (Kyoto CSEAS Series on Asian Studies 16), Ishii, Sari K ed., NUS Press and Kyoto University Press, 2016
2. 「グローバル化とつながり合いの変容：国境を越える家族」『現代社会を読み解く』霜田求ほか（編著）晃洋書房, 2015
3. “Mothers on the Move: Transnational Child-Rearing by Japanese Women Married to Pakistani Migrants”, David W. Haines et al. (eds.), *Wind Over Water: Migration in an East Asian Context*, Berghahn Books, 2012
4. 「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」『移民のヨーロッパ：国際比較の視点から』、竹沢尚一郎（編）、明石書店、2011 年
5. 『越境の人類学：在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会、2008 年